

心理臨床におけるイニシエーション概念についての研究

ーセラピストとクライアントの関係性に着目してー

小島 純一

1. はじめに

心理臨床において、イニシエーション (initiation) という言葉を耳にすることは少なくない。イニシエーションは「個人をある特定のステータスから別のステータスへと通過させること」(van Gennep, 1909/2012)を目的とした儀式であり、具体的には成人式、結婚式、葬式など人生の節目の通過を促す儀式を指す。文化人類学者 van Gennep(1909/2012)は、イニシエーションが分離・過渡・統合という3つの段階をもつとともに、「聖と俗」「死と再生」といった象徴的体験をその特徴としてもつことを見出した。また、宗教学者 Eliade, M.(1958/1971)は、イニシエーションを「一個の儀礼と教育群」と定義し、その目的を「加入させる人間の宗教的・社会的地位を決定的に変更すること」とした。さらに、未開社会のイニシエーションを部族の成人式、秘儀集団の加入礼、呪医やシャーマンの召命の3つに分類するとともに、象徴的なアプローチから割礼、抜歯などの苦痛を伴う外科的手術や儀式的木登りなどの様々な儀礼のもつ意味を考察した(Eliade, 1951/2004)。こうした人間の変容を促すために連綿と続けられてきたイニシエーションの知見は、心理臨床の領域でも有効な視点を与えるものとして論じられてきた。

本研究は、心理臨床においてイニシエーションという概念がいかなる意味をもつのか、また、この概念が用いられるとき、どのようなことが理解されるのかについて、イニシエーションの観点から論じられた既存の事例研究を通じて検討するものである。

2. 心理臨床におけるイニシエーション概念の成立過程

心理臨床において、イニシエーションにまつわる概念は古くから取り上げられてきた。精神分析の創始者 Freud, S.は、『トーテムとタブー』(1912-1913)の中で未開社会のトーテム信仰やタブーに関する儀礼と現代の神経症者の心理や儀式的行為との関連を指摘した。Freudは、「強迫的禁令の一部は、ある種の行為の実行によって棚上げされうる。その行為も必然的に為されねばならず、強迫的性格を持つもの—強迫行為—である」と述べ、強迫行為の本性は悔恨・贖罪・浄めであるとしている。具体的には、現代人の強迫行為として代表的な洗浄強迫を取り上げ、未開社会のタブーの慣習でも、水による浄めの儀式がよく行われていたという例を挙げている。

一方で、Freudと袂を分かち、分析心理学を創始した Jung, C. G.は、人間の普遍的無意識の中に、未開社会のイニシエーション元型が存在することを見出した。Jung(1952/1992)は『変容の象徴』において初めてイニシエーション論を基礎づけた。この著作の中で Jung は、Freud が性

的エネルギーとして設定したリビドー論を批判して、心的エネルギー全体を指す概念としてより幅広くリビドー概念を捉えることを提起し、その質的な変容過程を英雄神話に対応させて論じた。また、Jung(1953/1995)は、未開社会のイニシエーションを「人を動物の状態から人間の状態へと移行させる呪術的手段」、「大きな精神的意義をもった変容の秘儀」であるとし、「現代人の無意識内容の中にこそ、イニシエーションの象徴表現そのものが、まごうことなき明瞭さで現れている」と述べている。つまり彼は、夢の中に未開社会のイニシエーションと共通のテーマやモチーフが生じ、それを注意深く観察することで個性化のプロセスが進展すると考えた。

こうした Jung の業績は、弟子である Neumann, E. や Henderson, J. によって発展させられてきた。Neumann(1954/1984)は、『変容の象徴』の内容を発展させて、自我の発達過程を創造神話や英雄神話を用いて描き出した。始原的なウロボロス状態として生まれた自我が無意識から分離し、英雄として象徴的な母親殺しを経てその土台を確立するとともに、無意識的自己との適切な距離を保持するというものである。また、Henderson(1967/1974)は数多くの夢分析の経験から、イニシエーションのプロセスを整理するとともに、その循環的な性質について触れている。

わが国では、河合(1975)によって分析心理学の立場からイニシエーション概念が紹介された。河合(1975)は、イニシエーションを「未開社会において、ある個人が成長して、ひとつの段階から他の段階へと移行するとき、それを可能にするための儀式」であるとし、Jung が指摘した普遍的無意識におけるイニシエーション元型の存在に加え、そこに認められる「聖と俗」「死と再生」の主題や、イニシエーション元型が布置されたときに体験されるヌミノース (numinose) の感情、セラピストとクライアントの関係性といった具体的な特徴について幅広く考察している。その後、イニシエーションの観点から事例の展開を理解しようとする事例研究が数多く発表されてきた(岩宮, 1994; 清水, 2019 など)。

しかしながら、イニシエーションという概念そのものが詳細に吟味されたり、説明されることは少ない。これは、イニシエーションという言葉が心理臨床の領域にとどまらず、幅広い領域で知れ渡るようになるにつれて、その多義的な概念が拡散し、曖昧になったためであると考えられる。多くの人々はイニシエーションという言葉から“試練”、“儀式”、“自立”、“死と再生”といった様々な意味を思い浮かべる一方で、具体的な共通の理解を得ることなく済ませてしまう場合が多いのではないだろうか。また、こうした概念の拡散は、多義的な概念の単純化・図式化の問題にもつながる。田熊(2020)は同様の問題を同じく分析心理学で元型とされる「トリックスター」の概念で指摘しているが、こうした概念の拡散には問題があるといえる。

ところで、心理臨床実践において「イニシエーション」という視点が用いられるとき、それはセラピスト側の視点からクライアントの変容過程を考察したものである。したがって、本研究で扱うイニシエーションに関する研究は、当然のことながらセラピスト側から「イニシエーション」という視点によって検討された事例研究ということになる。心理療法のプロセスを理解する場合、わが国では事例研究を中心に行われる一方で、「事例をみる『視点』そのものを対象とした研究はほとんどなされてこなかった」と指摘されている(高嶋他, 2008)。また、鈴木(2017)は、「事例研究を通して事例のプロセスを検討する際には、『内面的な主体機能という個人的で主観的な心の動きに関する事実』から『他の事例へのアプローチに普遍的な仮説機能』を読み取っていく、セラピストの視点がおのずと含まれていると考えられ、その視点にも何ら

かの共通性があるという前提が成立すると考えられる」と述べている。数々の臨床家が自身の担当した事例を「イニシエーション」という共通の観点から眺めるとき、それらの事例のプロセスには何らかの共通点があると考えられるだろう。しかし、臨床家が異なる事例を共通の視点から眺めるとき、そこにいかなる共通性があるのかということについての検討はいまだなされていない。

そこで、本研究では「イニシエーション」という共通の観点から考察された複数の事例研究を分析対象とし、そうした事例ではどのようなプロセスが生じているのかを探ることを通して、心理臨床におけるイニシエーションとはいかなる概念であるのかについて検討することを目的とする。また、イニシエーションという視点が用いられる事例において、セラピストとクライアントの間にはいかなる力動が生じているのかについて考察することも目的とする。

論文の収集にあたっては、「イニシエーション」「通過儀礼」「儀式」と「心理」「臨床」「事例」のキーワードを組み合わせてインターネットの学術論文データベース「CiNii」および『心理臨床学研究』と『箱庭療法学研究』のバックナンバー検索フォームを検索し、イニシエーションの観点から考察された事例研究をピックアップした¹⁾。そして、心理臨床領域の学術雑誌は守秘義務の観点からネット上のデータベースでは検索できない形で管理されている場合も多いため、それらの中でも幅広い立場からの事例研究が掲載されている『心理臨床学研究』（6編）および『箱庭療法学研究』（11編）における論文を計17編収集した（表1を参照）。この17編を総合的に読むことで、イニシエーション概念の全体像を探索的に捉えることとした。なお、表1に記載の主訴・状態像は、倫理的な観点から、本質を損なわない程度に簡素化した。本研究は、京都大学臨床心理学研究倫理審査委員会の承認を得て行われた（承認番号20015号）。

表1 イニシエーションの観点から考察された論文一覧

【箱庭療法学研究】						投影同一化にまつ セラピストのイニシエーションへの言及	
刊行年	著者名	面接形態	主訴・状態像	性別	年齢	わる展開への言及	エーションへの言及
1994	岩宮恵子	カウンセリング	摂食障害（拒食）	女	12歳	あり	あり
2000	太田秀樹	カウンセリング	不登校	男	16歳(高校2年)	なし	なし
2002	岸井謙児	施設での関わり	親子関係	男	12歳(中学1年)	あり	あり
2005	篠原道夫	プレイセラピー	不登校（強迫症状、うつ病、不眠）	男	12歳(小学6年)	あり	なし
2008	橋本朋広	カウンセリング	不登校	男	中学3年	なし	なし
2010	井上靖子	カウンセリング	学校不適応（解離、幻聴、幻視等）	女	12歳(小学6年)	あり	あり
2011	宮澤淳滋	カウンセリング	摂食障害（拒食・過食）、強迫症	女	18歳	あり	なし
2012	久保陽子	プレイセラピー	明確な主訴はなし（学校不適応、心身症）	男	13歳(中学1年)	なし	なし
2013	橋本尚子	学生相談	不眠	女	18歳(大学1年生)	あり	なし
2013	佐藤仁美	カウンセリング	境界性パーソナリティ障害	女	20代後半	なし	なし
2013	佐藤淳一	プレイセラピー	学校での対人関係・学業不振	男	中学1年	あり	あり
【心理臨床学研究】						投影同一化にまつ セラピストのイニシエーションへの言及	
刊行年	著者名	面接形態	主訴・状態像	性別	年齢	わる展開への言及	エーションへの言及
2000	山愛美	カウンセリング	継続的な自己不全感	女	20歳代	なし	なし
2004	西村則昭	カウンセリング	不登校(別室登校)	女	中学3年	なし	なし
2005	鈴木信子	カウンセリング	職場トラブルによるパニック発作	女	30歳代	あり	あり
2009	上田琢哉	学生相談	強迫神経症	男	21歳(大学3年生)	なし	なし
2017	山路有紀	学生相談	抑うつ気分、将来への不安など	女	20歳代(大学3年生)	なし	なし
2019	清水亜紀子	カウンセリング	手術に伴う心理的不安や死への恐怖	女	40歳代	あり	あり

3. イニシエーションの入り口としての12, 13歳

まず、上記の17編の事例研究で扱われたクライアントの特徴に着目し、そこから浮かび上がる点について“イニシエーションの入り口”という観点から検討したい。

クライアントの特徴に目を向けると、性別にかたよりはしないものの、年齢は12歳～20歳代の思春期・青年期に相当する年代が15例に及んだ。特に、小学校6年生(12歳)と中学1年生(13歳)という小学生から中学生への過渡段階にあるクライアントは6例であり、高校入学を控える中学3年は2例、社会人としての進路決定を迫られる大学3年生は2例であった。思春期は生物的・心理的・社会的な過渡段階にあたり、イニシエーションと深いかかわりをもつ時期である(岩宮, 2000; 河合, 2005)。生物的には第二次性徴が始まり、身体的に子どもから大人へと移行していく。心理的には自立心が芽生え、両親から離れようとする動きがみられたり、異性とのかかわりを意識し始める。社会的には小学校、中学校、高校という学校環境の変化のみならず、中学からの部活動等で上下関係が生じたり、学業成績に応じて受験に挑んだりといった変化が生じるようになる。こうしたさまざまな過渡段階を迎えるに伴って生じる危機が症状として顕在化し、カウンセリングの場を訪れることに繋がったと考えられる。

ここでは特に、小学校6年生～中学1年生にあたる思春期のクライアントの事例が6例と全体の約3分の1を占めていることについて考察したい。河合(1987)は鎌倉時代の僧、明恵上人の「われ、13歳にして既に老いたり」という言葉から、子どもはこの時期に「子どもとしての完成¹⁾」に達するのではないかと述べている。明恵は13歳の時に自殺を決意し、墓に我が身を横たえて野犬や狼が自身の体を喰いに來ることを待ったが、動物は生きた人間を食べようとしないため生き延び、自分が生き続けることは仏の意志であろうと考えなおし、自殺を思いとどまったという。これは、一度死を覚悟し、再び生きることを決意するという内的なイニシエーションの体験であったと考えられる。生きたまま狼に喰われるというモチーフが古代のイニシエーションにもみられるということは、河合(1987)も指摘している通りである。

河合(1987)は、12、3歳頃に一度子どもとしての完成を迎えた彼らが、来るべき未知の混乱の深さに対する予感も相まって、その完成状態を維持するために自殺するということも考えられるのではないかと指摘している。鎌倉時代を生きた明恵の心性が現代を生きる子どもの心性にどれほど当てはまるかということは慎重に考えるべきであろうが、イニシエーションという視点から考察された現代の事例のうち12、3歳の事例が全体の約3分の1を占めているという本研究の結果に鑑みると、単に小学校から中学校への環境の変化という外的要因だけではない心理的な節目をこの年代の子どもが迎えると考えerことは一定の妥当性をもつといえるのではないだろうか。

これら6例の主訴を眺めると、不登校といった学校関連のものが主であるものの、詳細にみていくと心身症、不眠、強迫症状など多彩な症状がみられる。また、面接展開に目を向けると、クライアントの自傷行為、行動化、セラピストへの攻撃といった激しい展開が比較的多く生じていることがわかる。

こうした複雑さの背景には、子どもから大人へと成長するうえで、クライアントが男性性や女性性とどう向き合っていくかというテーマが存在するという点で共通しており、彼らが男性性や女性性の世界に開かれていく展開が見て取れる。12, 3歳は思春期の入り口といえる年齢で

あり、男性性・女性性という“性”のテーマや“死”のテーマが表れる年齢であると考えられる。こうした性と死のテーマに向き合う直前までがいわば子ども時代であり、河合の言う「子どもとしての完成」に相当するといえる。性と死のテーマの出現に伴う心身の強烈的な衝撃から身を守る役割を未開社会のイニシエーションは担ってきたものの、そうした制度的なイニシエーションを失った現代社会では、心理療法によってその代わりがなされていると考えることができるだろう。なお、これらの事例に共通して、家庭環境や両親との関係における困難等も症状形成の一因となっていることが窺える。クライアント個人の要因のみに還元せず、家庭環境の基盤の弱さといった複眼的な視点から見立てを行うことが重要であることに変わりはない。

それでは、イニシエーションの観点から考察される心理療法では、具体的にいかなる作業がなされているのであろうか。例えば、岩宮(1994)では、摂食障害という形で自身の女性性を拒否していたクライアントが、箱庭や描画の中に表現されたかぐや姫のイメージに導かれて自身の女性性を受け入れ、少女から大人になっていく過程が描かれている。また、佐藤淳一(2013)は、被虐待経験のあるクライアントが激しいちゃんばら遊びや箱庭を用いた過酷な遊びを展開する中で、「死と再生」の主題を繰り返し表現したことを報告している。佐藤は激しいプレイの展開について、被虐待経験の再演として考察しているが、暴力性という広い意味での“死”のテーマや、男性性の獲得というテーマとクライアントが向き合っていると捉えることもできるだろう。こうした性と死のテーマを受け入れていくプロセスはその他の3事例にもある程度共通することを考えると、12,3歳に相当する思春期前期は、急激に立ち現れる性と死のテーマを文字通りのこととしてではなく、象徴化されたイメージの形で、内的に抱えられるような仕方を受け止めることが課題であると考えられる。この点に関連して、岩宮(2004)は、思春期は「日常的世界である『こちら側』とは異なる位相をもつ『あちら側』の世界から襲ってくる性と暴力という2つの力に否応なく圧倒される時期である」と述べている。このように、性と死のテーマに意識的・無意識的に直面したクライアントが、自らのイメージ表現を介してそれらと向き合っていくことが、現代の心理療法においてなされるイニシエーションの1つの特徴であるといえる。

その一方で、中年期や老年期のイニシエーションを論じた事例は今回調べた範囲では見当たらなかった。中年期は思春期に次ぐ人生の中での過渡期といわれており、Jungが「人生の正午」として中年期の危機を指摘したことは現代の社会状況にもつながる問題意識として有名である。思春期・青年期以外の年代を生きるクライアントをイニシエーションの観点から捉え直すことは、今後の課題といえる。

4. 事例の展開とイニシエーションに関する2つの視点

ここまで、わが国の心理臨床におけるイニシエーション概念の成立過程について検討し、症状と未開社会のイニシエーション儀礼の類似性を指摘する Freud の立場と、面接内で報告された夢や箱庭などのイメージの展開にイニシエーションの特徴を見出そうとする Jung の立場があることをみてきた。また、わが国の事例研究を概観し、前節ではそこで扱われたクライアントの特徴から、浮かび上がるイニシエーションのテーマについて検討した。以下では、各事例の展開に目を向けることで、心理臨床におけるイニシエーションという視点の具体的なありよ

うについて検討していきたい。

イニシエーションの観点から事例研究の展開を理解する立場は、クライアントの抱える症状や病をイニシエーションの視点から理解しようとする方向性(宮澤, 2011; 篠原, 2005; 橋本, 2013 など)と、面接の展開や面接内で報告されたイメージの流れをイニシエーションの視点から理解しようとする方向性(西村, 2004; 上田, 2009; 久保, 2012 など)の2種類に分類することができるⁱⁱⁱ。

前者の例では、篠原(2005)は、男性性の弱い家庭で育ったクライアントの服装倒錯(女装したり、妹に自分の学生服を着せたりする)を未開社会の両性具有化のイニシエーションの再演と捉え、男性性の模索の試みとして理解することで、その臨床的な意義を見出している。その他にも、クライアントが侵入的な家人を自室に入れずに引きこもったことに関して、境界を確立し、自ら聖域を形成する試みであると捉えたり、眠らずに徹夜して面接に来ることを未開社会のイニシエーション的試練の再演であると捉えるなど、面接の節目で現れたクライアントの行動様式をイニシエーションの再演として理解している。

また、宮澤(2011)は、クライアントにあらわれた摂食障害や強迫症状やリストカットなどの症状をイニシエーションの観点から捉えている。これらの症状も、断食や身体に傷を入れる儀式など未開社会のイニシエーションとの類似性から、その再演であると考えることができる。論文の中で直接には考察されていないものの、同様の症状がクライアントに見られた岩宮(1994)や上田(2009)も同様の視点から捉えることができるだろう。

これらは、症状を未開社会のイニシエーション儀礼の再演と捉える点で、Freud 的な視点と言い換えることができるだろう。先に論じた Freud の立場は、Jung 派の立場から見れば、無意識的な行動を病的なものとなす視点であるとして批判されるであろうが、上記のように一見破壊的な行動の中にイニシエーションの兆候を見出し、創造的な可能性を見出すことは、臨床的にも有用な視座を与えてくれることがわかる。

後者の例では、西村(2004)は、思春期女子のイニシエーションについて、実際の事例の展開を参照しながら「まず男性像(アニムス像)を通して、同性愛的なエロスに触れながら、しだいにその男性像とエロ的に深く関連する女性像を見だし、その女性像を通して、女性としての異性愛的なエロスに触れ、心身の女性性を受容していく過程であり、その過程を根底において駆動する力として、死の欲動がある」と考察している。久保(2012)は、思春期男子が面接内で制作した箱庭作品の変容プロセスを自我の確立過程を捉え、Neumann(1954/1984)に拠って、創造・英雄神話の視点から考察している。また、上田(2009)は、イニシエーションの機制の中でも「見る」という行為の重要性に着目し、大学生のクライアントが報告した夢の登場人物の「見る」あり方の変化からイニシエーションの過程を検討している。

これらは、夢や箱庭といったイメージの変容過程を物語的に理解し、未開社会のイニシエーションと類似のプロセスであると捉える点で、Jung 的な視点と言い換えることができるだろう。このように考えると、心理臨床におけるイニシエーション概念は、単に自我の確立や母子分離による自立の達成といった発達の前進の内容や結果を指すのではなく、面接過程における変容の“現象”およびその“形式”を指す概念であることがわかる。

ここまでの記述から、「イニシエーション」は何らかの発展的・前進的な方向性を前提とした

概念であるという印象を与えているかもしれないが、単に変容の“現象”やその“形式”を指すものであるということに鑑みれば、決してそうとは言い切れない。むしろ反対に退行・後退することもイニシエーションの自然なあり方なのであり、前進と後退を繰り返す「循環的な性質」(Henderson, 1967/1974)をもっており、そうした変化の節目にセラピストが意識を向けることが重要であるといえる。

5. イニシエーションと治療関係

前節では、各事例の展開に着目し、クライアントの症状や行動を未開社会のイニシエーションの再演と捉える Freud 的な視点と、面接の中で報告される夢や箱庭や語りなどの表現の中にイニシエーションとしての変容過程を見出そうとする Jung 的な視点があることを考察した。

これらの研究は、現代人の無意識の中に、未開社会のイニシエーションの特徴が残され、受け継がれてきたことを指摘しているという点で共通している。これは、クライアント個人のうちに生じる思考、行動やイメージの中に、イニシエーションのモチーフを見出そうとする立場である。こうした視点をもつことは、例えばクライアントの症状に由来する行動からその症状のもつ心理的意味を推測したり、クライアントが夢の中で「死と再生」のプロセスを経るなどして現実面でも変化を遂げていくといったように、クライアントの内的・外的変容の契機を捉えたりすることにつながる。

こうした2種類の理解の視点に加えて、欠かすことができないのが、セラピストとクライアントの関係性においていかなる力動が生じるのかという視点である。ここからは、イニシエーションという視点から事例展開が考察される際、治療関係においていかなる特徴がみられるのかという点について、セラピストがセラピスト自身の変容過程に着目することの意義という観点から検討していく。

Freud や Jung がクライアント個人の症状やイメージのうちにイニシエーションの特徴を見出そうとしたのに対して、そうしたイニシエーションの特徴が表現されることを支えるセラピストークライアント関係の重要性を初めて指摘したのは、Jung 派の分析家 Henderson である。Henderson(1967/1974)は、「もし治療者が一たとえ意図的にしろ、関心の薄いためであろうと、また知らないためであろうと—このような元型的なイメージに気づかずに、共感を寄せずに応答するならば、イニシエーションの象徴は多分発展しないだろう」と述べ、クライアントの無意識に形成されたイニシエーション元型の理解を支えるセラピストの態度の重要性に言及している。

また、河合(1975)は、「治療者のイニシエーション」として、心理療法の過程ではクライアントのみならず、セラピストにとってもイニシエーションの体験がなされることを指摘している。一般的にはセラピストがクライアントにイニシエーションを授ける長老と見なされがちであるが、実際の心理療法ではその立場が逆転し、クライアントが長老の立場となってセラピストにイニシエーションを授ける場合があるとして、その役割の“相互性”を指摘している(河合, 1975)。

これまでは、クライアントの個人内で生じる変容過程をイニシエーションの観点から理解する立場が主流であったことを論じてきたが、河合(1975)は、セラピストがセラピスト自身の変容過程に着目する意義を認めているところにその独自性がある。心理療法においては、クライ

エントのみならず、セラピスト自身の変容過程を理解することが、クライアントの理解にもつながるのである。逆転移の有効性は力動的心理療法の歴史の中ですでに数多く論じられてきたが、今回はイニシエーションの観点から理解される事例において、セラピスト―クライアントの二者関係においていかなる力動が生じているのかについて、実際の事例の展開に目を向けながら検討していきたい。

①身体性レベルでの共感と一体化の動き

まず、今回取り上げた17事例中9事例にセラピスト―クライアント関係において生じた投影同一化にまつわる考察が行われていたことから、心理臨床におけるイニシエーション概念は、治療関係における投影同一化と関連が深いことが推測された(表1を参照)。投影同一化(projective identification)とは、対象関係論学派で発展してきた概念であり、投影の主体であるクライアント/乳児が自己の悪い部分である怒り、軽蔑などのネガティブな情動を排出し、受け手である治療者/母親に体験させることである(藤山, 2002)。この点と関連して、井上(1997)も、心理療法における「治療者としてのイニシエーション」の始まりに投影同一化の機制が関与していることを指摘している。また、Jung(1935/1989)も「医師は一般に感染やその他の職業的危機にさらされているが、同じように、心理療法家も恐ろしい心理感染の危機を背負っている」と述べ、別の角度から論じている。

例えば、佐藤淳一(2013)は、被虐待経験のあるクライアントが激しい攻撃を伴うプレイの中でセラピストに「背筋が凍りつくような恐ろしさ」を体験させたことについて、このような「恐怖感や無力感はクライアントが心の奥底に抱えていたものと思われる」と述べている。同様の展開として、篠原(2005)では、クライアントが母子一体的な治療関係を形成する中で、家庭生活の荒れをプレイセラピーの治療場面に持ち込み、セラピストにボールをぶつけるなど破壊的な展開が生じていったことに触れている。

また、井上(2010)は、面接が始まって間もない頃、面接の翌日に「胸をかきむしられるイライラに襲われ」、そのときの気持ちをメモに書きつけると“死ね”“ボケ”“存在が無視された”といった言葉が出てきたことを報告している。そして、こうした「憑依のような体験」からセラピスト自身の意識を沈潜させ、「からだ」の語りを傾聴することで、クライアントを別次元から理解する手がかりを得たという。そして橋本(2013)は、不眠を主訴として来談したクライアントとの面接過程で、セラピストの側が面接中に疲れや眠気に襲われたり、「どこからくるのかわからない悲しみに襲われて泣きそうになる」体験をしたことに触れている。著者であるセラピストが、自身が体験した悲しみはクライアントが切り殺してきたものと考察していることから、セラピストがクライアントの主訴を引き受けていた様子が見て取れる。

概して、心理療法の過程で投影同一化の機制が生じることは珍しいことではない。しかし、イニシエーションの観点から考察される面接は、上記のような「身体性レベルの共感」(田中, 2013)という次元での一体化が生じやすいことが一つの特徴といえるのではないだろうか。心因性頻尿と不登校を主訴とした13歳少女との面接過程を検討した田中(2013)は、クライアントと同じ腹部重鈍感という身体症状を面接過程でセラピストも体験したことについて、セラピスト側に「身体性レベルの共感」が生じるとともに、母親代理ともいえるセラピストとの間で母性的な同一化を経て回復していったと述べている。

先の井上(1997)は、シャーマンとしてのイニシエーションと治療者としてのイニシエーションを比較し、どちらも「あちら側」の世界へ行って、「こちら側」の世界へ戻ってくるという共通点をもつことを指摘している。「身体性レベルの共感」を経て、クライアントの内的世界という「あちら側」の世界での体験を「こちら側」の世界に持ち帰る術は、自らの逆転移の体験をクライアントの理解につなげるとともに、それによって自らの臨床的視野を広げることが第一であると考えられる。

なお、投影同一化にまつわる面接の展開について触れている9事例のうち、6事例の著者がこうした劇的な一体化の体験を経て、セラピストとしてのイニシエーションに授かったという体験を述べている。身体性のレベルでクライアントから受け取ったものにセラピストが振り回されることなく、自分のものとしてその逆転移の体験を消化し、クライアントに言葉で伝え返したりすることで(岸井, 2002)、今後の臨床実践における糧として活かしていこうとする姿勢が、面接を創造的な展開に導くといえるだろう。

②分離をはらんだ動きとしての一体化

前節では、イニシエーションの観点から考察された事例の中では、セラピストとクライアントの一体化がしばしば起こっていることから、投影同一化の機制がイニシエーション概念と深い関係をもつということについて「身体性レベルの共感」という切り口から考察した。ここではそのことと関連して、聖所と面接室のもつ役割の違いから未開社会のイニシエーションと心理療法の違いについて考察するとともに、そのような一体化が逆説的に分離の動きをもっているという点について検討したい。

イニシエーションの観点からなされた事例研究では、しばしば面接室がイニシエーションを行う「聖所」(Eliade, 1958/1971)に見立てられることがある(岩宮, 1994; 篠原, 2005; 井上, 2010など)。これは、未開社会のイニシエーションと現代の心理療法の構造的な類似性を指摘したものである。ところが、聖所と面接室の果たす役割を検討すると、両者の違いが見えてくる。

未開社会の成人式では、男子は人里離れた聖所に隔離され、これまで生活してきた女性的社会から切り離すことを目的としていたのに対して、現代の心理療法では、面接関係の中に器としての機能をもった関係性を形成し、その中で母子一体性(Kalff, 1966/1972)と呼べるようなつながりを体験するということが生じるという点が、両者の大きな違いといえるだろう^{iv}。これは、篠原(2005)や上田(2009)で男性セラピストが男性クライアントのイメージの中で女性的、母親的な役割を取り、ゆるやかなつながりをもつ関係性が形成されていることから窺える。つまり、面接室は、セラピストとクライアントの関係性に器としての機能が生じることを支える第2の守りとして機能するのである。

特に思春期のクライアントやがん患者など、死のテーマと近い状況にあるクライアントとの面接では、前節で論じたような「身体性レベルの共感」が生じやすく、強く深い転移関係の中でセラピストはクライアントと身体次元での一体化が生じることもある。その最たるものが清水(2019)の事例であろう。

清水(2019)は、死の危機に瀕する白血病患者との面接過程で、セラピストがクライアントと共に死に限りなく近い体験に参入していたことを述べており、こうした緊密な結びつきを「コムニタス関係」と表現している。コムニタス(communitas)とは、冒頭でも少し触れたように

文化人類学者 Turner, V.(1969/1976)がイニシエーションの過渡段階に生じているありようを表現するために用いた言葉である。それは、あらゆる身分や序列から解放された絶対的に平等な関係であり、そこでは「個人は相互に全人格的に関わり合いをもつ」とされる。つまり、「コムニタス関係」とは心理的な次元での究極の一体化を意味する関係といえるだろう。

ところが、こうした緊密な結びつきは、クライアントの死によって終焉を迎える。死に限りなく近い世界を共に体験する中で、クライアントは死にゆく存在として「あの世」へと、セラピストは生き続ける存在として「この世」へとイニシエートされたのである。しかし、セラピストがその後に見た夢の実感から、「魂の次元でのクライアントとの繋がりは保ったままこの世へと帰還するというイニシエーションをセラピストは遂げた」(清水, 2019)と述べていることは注目に値する。

緊密なコムニタス関係は一時的にしか続かぬものであり、その後には逆説的な分離が準備されている。しかしながら、十分なつながりを実感した上での分離は、完全に切り離されてしまうことではなく、内的なつながりを保ったままの分離なのである。この点について、Jung(1956/2000)は後期の名著『結合の神秘』において、「分離されなければならないのは、結合しうるのは分離されたものだけだからである」と述べている。

このように考えると、イニシエーションの過程では、セラピストとクライアントとの関係性において、分離の契機を内在した結合が生じ、さらに再結合の契機を内在した分離が生じるという弁証法的な動き(河合, 1998)が存在すると考えることができるだろう。

6. 本論のまとめと今後の課題

本論では、イニシエーションの観点から考察された事例研究を通じて、心理臨床におけるイニシエーション概念についての検討を行うことを目的とした。まず、心理臨床におけるイニシエーション概念の成立過程について論じた上で、今回扱った17編の事例研究のうち、6事例が12、13歳のクライアントを扱ったものであったことに着目し、河合(1987)の「子どもとしての完成」を迎えるという指摘に基づいて、性と死のテーマに直面することがイニシエーションの入り口として重要なきっかけとなっている可能性を論じた。

また、イニシエーションの観点から事例の展開を考察するとき、クライアントの症状を未開社会のイニシエーション儀礼の再演とみる Freud 的な視点と、治療過程で報告された夢や箱庭のイメージをイニシエーションとして捉える Jung 的な視点の2つの方向性があることについて、具体的な事例の展開を元に論じた。

そして、クライアントのみならず、セラピストとクライアントの二者関係においてイニシエーションの展開が生じていると捉える視点から、イニシエーションの観点から考察された事例では、投影同一化の機制を起点として、「身体性レベルの共感」(田中, 2013)に基づいた一体化が生じやすいことを論じた。また、そのような結合状態は逆説的に分離を内在した動きをもち、さらにその分離によって、新たなつながりがもたらされるという弁証法的な動き(河合, 1998)が生じるということについて検討した。

今後の課題としては、イニシエーションと身体性との関連を検討することが挙げられる。例えば、今回「身体性レベルの共感」(田中, 2013)によってクライアントとセラピストの一体化が

生じる場合があることに触れたが、身体はあくまでも自己と他者を区別する器であると考えられることもできる。このような点も含めて、イニシエーションにおいて身体がどのような役割を果たすかについて検討することは重要であると考えられる。

また、事例の過程の中で投影同一化が生じていることを指摘したが、投影同一化の概念は対象関係論学派の中でも Klein, M.以来さまざまな議論が重ねられており、本論では深く踏み込むことができなかった。分析心理学と対象関係論の接点を探りつつイニシエーション概念を検討することで、より立体的に理解することができるだろう。

なお、本研究では、わが国で発展した心理臨床領域におけるイニシエーション概念について検討することを目的としたため、対象を国内の事例研究 17 編に絞った。その意味で、本論は探索的段階の研究であり、今後は今回対象とした 2 誌以外の雑誌に掲載された事例研究や国外の関連論文も対象として分析する必要がある。

7. 引用文献

- Eliade, M. (1951). *Le Chamanisme et les techniques archaïques de l'extase*, Librairie Payot, Paris. (堀一郎 (訳) (2004). シャーマニズム 〈上〉〈下〉. ちくま学芸文庫.)
- Eliade, M. (1958). *Birth and rebirth: The religious meanings of initiation in human culture*. Harper & Brothers Publishers., New York. (堀一郎 (訳) (1971). 生と再生—イニシエーションの宗教的意義—. 東京大学出版会.)
- Freud, S.(1912-1913). *Gesammelte WerkeIX, Totem und Tabu*. Herausgegeben von Anna Freud, E. Bibring, E. Kris, Imago Publishing Co. Ltd., London, 1940, Achte Auflage, S.Fischer, Frankfurt am Main, 1996. (門脇健 (訳) (2009). トーテムとタブー. フロイト全集 12. 岩波書店. pp. 3-206.)
- 藤山直樹(2002). 投影同一化. 小此木啓吾(編集代表). 精神分析事典. 岩崎学術出版社. pp. 363-364.
- van Gennep, A. (1909). *The Rites of passage: Etude systematique des ceremonies*. Librairie Critique., Paris. (綾部恒夫・綾部裕子 (訳) (2012). 通過儀礼. 岩波文庫.)
- 橋本尚子(2013). 自己の刻印としての傷—眠れないことを主訴に來談した 18 歳女性との面接—. 箱庭療法学研究, **26**(2), 17-27.
- 橋本朋広(2008). 対称性と非対称性の弁証法としてのイニシエーション. 箱庭療法学研究, **21**(1), 47-61.
- Henderson, J. L. (1967). *Thresholds of Initiation*. Wesleyan University Press., Connecticut. (河合隼雄・浪花博 (訳) (1974). 夢と神話の世界—通過儀礼の深層心理学解明. 新泉社.)
- 井上亮(1997). 治療者としてのイニシエーションと宗教的なイニシエーション. 加藤清監修. 癒しの森—心理療法と宗教. 創元社. pp. 113-144.
- 井上靖子(2010). 「私は六条御息所だ」と述べた思春期女兒の心理療法過程—描画・物語表現にみる初潮のイニシエーション—. 箱庭療法学研究, **23**(2), 53-66.
- 岩宮恵子(1994). イニシエーションの過程としてみた治療場面—摂食障害の少女の思春期体験と「かぐや姫」イメージ—. 箱庭療法学研究, **7**(2), 3-14.
- 岩宮恵子(2000). 思春期のイニシエーション. 河合隼雄編. 心理療法とイニシエーション. 岩

- 波書店. pp. 105-150.
- 岩宮恵子(2004). 思春期をめぐる冒険. 日本評論社.
- Jung, C. G. (1935). *Grundsätzliches zur praktischen Psychotherapie*. GW 16, Walter-Verlag., Switzerland. pp15-32. (林道義(編訳)(1989). 臨床的心理療法の基本. 心理療法論. みすず書房. pp. 3-32.)
- Jung, C. G. (1952). *Symbole der Wandlung : Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie*. Rascher Verlag., Zürich. (野村美紀子(訳)(1992). 変容の象徴—精神分裂病の前駆症状〈上〉〈下〉. ちくま学芸文庫.)
- Jung, C. G. (1953). *Two Essays in Analytical Psychology, Collected Works, Vol7*. Pantheon Books Inc., New York. (松代洋一・渡辺学(訳)(1995). 自我と無意識. 第三文明社. レグルス文庫.)
- Jung, C. G. (1956). *Mysterium Coniunctionis*. Rascher Verlag., Zürich. (池田紘一(訳)(2000). 結合の神秘II. 人文書院.)
- Kalff, D. M. (1966). *Sandspiel: Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche*. Rascher Verlag., Zürich und Stuttgart. (山中康裕・大原貢(訳)(1972). カルフ箱庭療法. 誠信書房.)
- 河合隼雄(1975). 心理療法におけるイニシエーションの意義. 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, **2**, 123-128.
- 河合隼雄(1987). 明恵 夢を生きる. 京都松柏社.
- 河合隼雄(2005). 思春期のイニシエーション. 臨床心理学, **5**(3), 金剛出版. 340-344.
- 河合俊雄(1998). 概念の心理療法. 日本評論社.
- 河合俊雄(2000). 心理臨床の理論. 岩波書店.
- 岸井謙児(2002). 「ドラマの場」としての箱庭—通過儀礼の「ドラマ」を生きたS君の箱庭事例一. 箱庭療法学研究, **15**(2), 3-15.
- 久保陽子(2012). 箱庭にみる思春期男子のイニシエーション—戦いをくりかえした英雄の旅—. 箱庭療法学研究, **25**(2), 25-37.
- 宮澤淳滋(2011). 夢の展開と自立の過程—夢の中でイニシエーションを体験した青年期女子の面接過程—. 箱庭療法学研究, **24**(1), 19-33.
- Neumann, E. (1954). *The Origins and History of Consciousness*. Pantheon Books Inc., New York. (林道義(訳)(1984). 意識の起源史〈上〉〈下〉. 紀伊國屋書店.)
- 西村則昭(2004). 少女漫画『天使禁猟区』と思春期女子の心理臨床. 心理臨床学研究, **22**(2), 105-116.
- 太田秀樹(2000). 通過儀礼における衝動統制を獲得する過程—不登校男子高校生との面接を通して—. 箱庭療法学研究, **13**(1), 59-72.
- 佐藤仁美(2013). 心理療法過程における生きられる空間とその枠作り—リストカット事例を通して—. 箱庭療法学研究, **25**(3), 65-78.
- 佐藤淳一(2013). 「死と再生」再考—被虐待経験のある中学生男子との遊戯療法—. 箱庭療法学研究, **26**(2), 5-16.
- 清水亜紀子(2019). イニシエーションの観点から捉えた癌患者との心理療法. 心理臨床学研究, **37**(2), 121-132.
- 篠原道夫(2005). 思春期イニシエーションとしての心理療法—多様な症状を呈した思春期不登

- 校男子との心理療法過程一. 箱庭療法学研究, **18**(2), 3-18.
- 鈴木信子(2005). 夢を語り続ける女性との面接. 心理臨床学研究, **23**(2), 233-243.
- 鈴木優佳(2017). 事例研究のメタ的分析の試み—複数セラピストの視点の共通性と心理療法プロセスのよみ方に着目して—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **63**, 27-39.
- 田熊友紀子(2020). 箱庭と主体の生成に関わる現代のトリックスター. 箱庭療法学研究, **32**(3), 81-102.
- 高嶋雄介・須藤春佳・高木綾・村林真夢・久保明子・畑中千紘・重田智・田中史子・西嶋雅樹・桑原知子(2008). 学校現場における事例の見方や関わり方にあらわれる専門的特徴—教師と心理臨床家の連携に向けて—. 心理臨床学研究, **26**(2), 204-217.
- 田中慶江(2008). 13歳少女のイニシエーションに関する一考察—初潮と猫イメージをとおとして—. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **54**, 558-571.
- Turner, V. W. (1969). *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Aldine Publishing Company., Chicago. (富倉光雄(訳)(1976). 儀礼の過程. 思索社.)
- 上田琢哉(2009). 内的なイニシエーションにおける「見る」ことの意味—ある「永遠の少年」の夢の過程から—. 心理臨床学研究, **26**(6), 722-733.
- 山路有紀(2017). 学生相談における“異”の体験—巣立ちのイニシエーションとしての面接過程—. 心理臨床学研究, **35**(2), 146-156.
- 山愛美(2000). ある女性のイニシエーション過程. 心理臨床学研究, **17**(6), 582-593.

註

ⁱ 「死と再生」はイニシエーション概念と関連の深いキーワードの1つであるものの、本論で扱うイニシエーション概念とは独立した、より多義的な概念であり、本論の目的を逸脱すると考えたため、今回検索ワードには加えなかった。

ⁱⁱ 「子どもとしての完成」(河合, 1987)とは、「性」の衝動にどう取り組み、どう生きるかということが生じる直前の状態であり、いわば“嵐の前の静けさ”と表現することもできるだろう。感受性の高い子どもはこの「完成」状態を維持するために自殺することもあると河合(1987)が指摘していることから推察される通り、「性」の問題と「死」の問題はこの時期に表裏一体となって子どもに襲いかかると考えられる。

ⁱⁱⁱ なお、いずれの研究も上記の2種類の方向性のうちどちらかに明確に分類できるわけではなく、どちらかを主軸としつつ、2つの視点が輻輳的に織り交ぜられながら考察される場合がほとんどである。

^{iv} ただし、心理療法では面接関係の中に一体性を生じさせることが目的とされるわけではなく、面接過程の中でクライアントのイメージの中に生じる母なるものとの一体性の希求を面接関係の中でもパラレルに体験していくといった形で、自然に起こってくるものであると考えられる。

(臨床心理学コース 博士後期課程2回生)

(受稿2020年8月30日、改稿2020年11月8日、受理2020年12月7日)

謝辞

本論文を執筆するにあたりご指導いただきました、京都大学大学院教育学研究科松下姫歌先生、梅村高太郎先生に感謝申し上げます。

心理臨床におけるイニシエーション概念についての研究

—セラピストとクライアントの関係性に着目して—

小島 純一

本研究は、心理臨床におけるイニシエーション概念について検討することを目的とした。イニシエーションとは、人生の節目において人間がある段階から別の段階へ移行するのを助ける儀式を意味し、文化人類学から心理臨床領域に導入された。本研究では、イニシエーションの観点から考察された事例研究 17 編を概観し、症状を未開社会のイニシエーション儀礼の再演と捉える Freud 的な視点と夢や箱庭に表れるイメージの流れをイニシエーションの展開として捉える Jung 的な視点の 2 種類があることを論じた。また、セラピストとクライアントの関係性に着目し、イニシエーションの観点から考察された事例では、両者の“一体化”が生じやすい傾向があることを論じた。また、セラピスト自身が逆転移的な体験をクライアント理解につなげることがセラピストとしてのイニシエーションをもたらす可能性について論じた。今後の課題として、海外の事例も対象とすること等が指摘された。

A study on the concept of initiation in clinical psychology: focusing on the relationship between therapist and client

KOBATAKE Junichi

This study was performed to consider the concept of “initiation” in clinical psychology. The concept of initiation, referring to rituals supporting someone to transfer from one status to another in their life, was introduced from anthropology. First, it was discussed from two perspectives based on 17 case studies. The first is Freud’s perspective, which regards a client’s symptom as a replay of primitive initiation rites. The other is Jung’s perspective, which regards a series of images expressed in client’s dreams or sandplay as the development of initiation. Second, focusing on the relationship between the client and therapist, it was suggested that unification of them in the case studies which discussed from the point of view of “initiation”. Using the therapist’s own experience of countertransference to understand their clients leads to initiation as a therapist. Finally, it was noted that overseas case studies should be covered as a limitation of this study.

キーワード：イニシエーション、事例研究の概観、治療関係

Keywords: initiation, overview of case studies, therapeutic relationship